

の家の人達は皆牢屋から出て、家に歸る事が出来た。それから後は何も起らず、皆面白く暮した。

(支那お伽噺)

○モナチアとマナチア

昔、或る處に、モナチアとマナチアいふ二人の子供がありました。或日二人で大きな籠を持つて葡萄をつみに行きました。けれどモナチアがせつせと摘むとマナチアはそばから、それを食べてしまひました。

モナチア「私は葦を見つけて来て、マナチアの手を結へてしまふ。さうしないとみんな、マナチアが食べてしまふから」

かう云つて、モナチアは小川の岸に生えて居る葦の處へ行きました。

葦「何かいゝ話があるかね」とモナチアに聞きま
した。

モナチア「何もいゝ話はない。が、私の摘む葡萄を皆マ

ナチアが食べてしまふから、手を結へてしまはふと思つて、葦を一本もらひに來たのよ」と、
聞くよ

葦「いゝえ、それはいけない、私の葦を切る斧を持つて來なければ、持つて來たらあげよう」

かう云はれて、モナチアは材木の積みかさなつた、そばにある斧の處へ行きました。

葦「何かいゝ話があるのかね」

モナチア「何もいゝ話はない。が、私は斧が欲しい。其の斧で葦を切つて、其の葦でマナチアの手を結く。マナチアは私の摘む葡萄をみんな食べてしまふから」

葦「いゝえ、それはいけない。刃をとぐために私に石を持つて來なければ、持つて來たらあげよう」

それからモナチアは壁のそばにある石の處へ行きました。

石「何かいゝ話があるかね」

モナ「何もない、話はないが、私は石が欲しいんだ。」

石で斧を研いで、斧で葦を切つて、葦でマナチアの手を結くの、マナチアが私の摘む葡萄をみんなそばから食べてしまふから。」

石、いゝえ、それはいけない、私をぬらす水を汲んで来なけりや、汲んで来たらあげるよ」

モナチアは牧場の中の泉水のそこへ行きました。

泉水「何かいゝ話があるかね。」

モナ「何もない、話はない。が、私は水が欲しいんだ。」

水で石をぬらして、石で斧を研いで、斧で葦を切つて、葦でマナチアの手を結かなければ、私の摘む葡萄をそばからマナチアが食べてしまふから。」

泉水「いゝえ、それはいけない。牛をつれて来て水を飲ませてからでなけりや、それが出来たらあげるよ」

モナチアは野菜庫のそばに居る牛の處へ行きました。

牛「何かいゝ話があるかね」

モナ「何もない、話はない。が、私は牛が欲しいんだ。」

牛に泉水をのませて、泉水で石をぬらして、石で斧を研いで、斧で葦を切つて、葦でマナチアの手を結くの、マナチアは私の摘む葡萄を皆そばから食べてしまふから」

牛「いゝえ、それはいけない、百性から、藁を一つば貰つて来なけりや、もらつて来たらあげよう」

それからモナチアは小屋のそばに居る百性の處へ行きました。

百性「何かいゝ話があるかね」

モナ「何もない、話はない。が、私は藁一つかみ欲しいの、藁を牛にやつて、牛に泉水を飲ませて、泉水で石を濡らして、石で斧をといで、斧で葦を切つて、葦でマナチアの手を結くの、マナチアは私の摘む葡萄を皆そばから食べてしまふから。」

百姓「いゝえ、それはいけない、小川へ行つて笹の中に水を一杯持つて来なければ、持つて来たらげよう」

それからモナチアは笹を持つて、牧場の小川へかけて行きました。そして笹の中へ一つばい水を入れました、けれど上へ持ち上げる、水は目からもつて笹は空つぽになつてしまひました。幾度しても幾度しても、水はちつとも汲めないで、笹は空つぽで持ち上がるばかりでした。

モナチア「あゝあゝ、どうしたらいいんだらう、水はちつとも笹の中に残りやしない、ね、どうしたらいいの」と、聞くと小川の上をとんで居た鳥が、鳥「おぬり、おぬり、泥でおぬり」

モナチア「あ、さうだ、それは氣がつかかなかつた。」
早速泥を一つかみとつて笹の目をすつかり塗りました、そして水を一ぱい汲んで百姓の處へ持つて行きました。

百姓は藁を一つかみ呉れました。

牛は藁を食べました。そして泉水を飲みました。泉水は石をぬらしました。

石は斧をとぎました。

斧は葦を切りました。

モナチアは葦を持つて大急ぎでかけて歸つて来ました、早くマナチアの手を結かうと思つて。

けれど、食ひしんぼうの、マナチアはもう皆葡萄を食べてしまひました。そしてお腹がはちきれしてしまひました。(ケルトお伽噺)

○小さい黒蟻

或る處に小さい黒蟻が居ました。或朝、眞黒なお顔をよく洗つて、澤々したきれいな黒い着物をきて、氣持よくきれいに掃除をした家の窓のそばに坐つて居りました。

やがて窓のそばを大きな牡牛が通りました。そして、

「おはやう、きれいな黒蟻さん、あなた僕の嫁さ